かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 99 号

平成11年5月17日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（写真撮影　施設課　長島　　章）　　丘の山桜

新入生を迎えて……久保　良彦…2
医学科の新入生を迎えて……上口勇次郎…3
医療の優しい担い手として……岡田　洋子…4
医学科新入生記念写真……5
平成11年度医学科入学者名簿……5
看護学科新入生記念写真……6
平成11年度看護学科入学者・第3年次編入学者名簿……6
新入生を迎えて……井上　明子…7
新入生を迎えて……伊藤　直美…7
平成10年度学位記受領者名簿……8
平成11年度大学院入学者名簿……8
新教育課程の展開……石川　睦男…9
外国人留学生一覧……11
研究室紹介……清水　恵子…11
新歓合宿を終えて……榎本　年幸…12
大学祭のお知らせ……上田　泰久…12
中国高等教育事情調査団に参加して……石川　睦男…13
学内ニュース
平成10年度学士学位記授与式……15
平成11年度入学式……15
平成11年度運営組織……15
新入生研修実施される……15
平成11年度の主な行事……16
教官の異動……16
窓外……橋本　眞明…16

新入生を迎えて

学長　久保良彦

本日ここに集われた、医学科第１学年96名、看護学科第１学年60名、同じく看護学科第３学年編入学者10名の皆さん、ご入学おめでとうございます。難関を見事クリアされ、医学あるいは看護学の道に進まれる皆さんを、私どもは双手を挙げて歓迎いたします。また、今日までこのように立派に育んで来られたご父母の皆様のご苦労に、深く敬意を表し、心からお祝いを申し上げます。

この入学式に当たり、前途に拡がる希望で胸を一杯にされておられる新入生の皆さんに、ぜひ心に留め置いていただきたいことを二つだけ申し上げます。その一つは、これからの医学・看護学の学び方であり、いま一つは「挨拶の励行」ということです。

すでにご存じのように、今日の医学・医療の進歩・発展は目覚ましいものがあります。それは、わが国の社会・経済の安定を基盤にした科学、とりわけ生命科学研究の急速な進展と周辺科学技術の進歩によることはいうまでもありません。生命の営みや病気の仕組みが細胞・分子あるいは遺伝子のレベルで解明されつつあるとともに、医療技術の革新がまことに激しいのです。

このことは、学習しなければならない知識や技術の量を急速に膨らませるばかりでなく、学んだ知識・技術の寿命を極く限られたものにすることを意味します。これだけ学んでおけば、これだけ記憶しておけばそれでよろしいという時代ではなくなっているのです。

それでは、生涯学び続けなければならない医師・看護者となる学生は、大学で何を、どう学ばなければならないのでしょうか。

これまでの医学教育学の研究や日々の実践から、大学における医学教育は、従来の多くを教え学ばせるという教授法（teaching）より、学生が主体的に自ら学ぶ（learning）、すなわち自分で問題を見出し、自分で解決する力を身につける方向がよりベターであることが認識されて参りました。

本学では、教官と教務職員の方々が長い時間をかけ検討を重ねて下さり、今年度医学科入学の皆さんから、この方向を採り入れた新しいカリキュラムで医学を学んでいただく運びとなりました。皆さんは新カリ一期生ということになります。

このようなカリキュラムが実践されている大学は、国内ではまだ数校に過ぎず、先進の米国の大学でも年々改善の手が加えられているということで、決して完成した様式ではありません。むしろ、大学それぞれで気付いたところから手を加え、そのカリキュラムの改良を続けて行かなければならないものなのでありましょう。

ともかく、新しいカリキュラムの主旨から、学生が主役であります。ですからこの新カリの成否の鍵は皆さんが握っていることになります。このカリキュラムの効果をより高めるためには、皆さんのひたむきな向上心と、強い絆で結ばれた教官との連携が欠かせない要件となります。

今日、私が皆さんの心に留め置いていただきたいもう一つは「挨拶の励行」ということです。これは極めて日常的でつまらないことに思われるかもしれません。しかし、残念ながら現実はノーであり、患者に満足な挨拶の出来ない医師が少なくないという批判が絶えません。

通常、人と人との交わりは、挨拶から始まります。そして次第に交わりが深まり、心が通い合うようになるのです。

特に医療の世界では、この心の交流—とりわけ患者との交流がどれほど大切であるかは、世上、医療に係わる問題の多くがこの心の交流を欠いたことに端を発していることからも窺われます。

一般に良い医療者—医師および看護者—は、充分な医学知識と診療・看護技術を具え、しかも“共感する心”を持つ者とされます。

しかし、今日の医療は大変高度先進化し、技術も高度になっております。おまけに、例えば臓器移植・生殖医学などに見られるように、これまでの医療と違い広い範囲で社会的合意が必要な医療も増えて参りました。これらはややもすると医療者の“共感する心”を弱めたり、時には医療者にその心を忘れさせたりする条件となり得るものです。

医学・医療を学ぶその始まりから“通い合う心”をしっかり育てていただきたいと願う理由がここにあります。

“隗より始めよ”ということで、皆さん一人ひとりが言い出しっぺとなって、先輩・後輩に広めて行って下さい。

申すまでもありませんが、日本の社会・経済はいま大変な時期にあります。興味を引かれますことは、その中にあって様々な領域あるいは集団・個人を問わず、自主・自律とか自己解決が求められていることや、例えば心の経済といわれるように社会のいろいろな分野で“心”の有り様あるいは係わりが問われるようになってきていることです。独り医学・医療の分野に止まらない大きな変革の波が、広くわが国に押し寄せてきているように思えます。

21世紀の医療を担う皆さんには、本学において自ら問題を見出し解決する学習方法をしっかり身につけるとともに、是非“通い合う心”を育て、グローバルスタンダードに耐える医療人になっていただきたいと、心から念願いたします。

（平成11年４月９日　平成11年度入学式　学長式辞）

医学科の新入生を迎えて

医学科第１学年担当　上　口　勇次郎

医学科新入生の皆さん、入学おめでとう。

皆さんは大学入試という難関を突破して、ホッと一息ついていることでしょう。しかし、一つのハードルを越えた今は、進級、卒業そして医師国家試験へと続くより高いいくつものハードルへの出発点でもあり、すでにスタートは切られているのです。早く将来的目標を見定め、勉学、クラブ活動など日々の生活をその中の１ステップとして位置付けてほしいものです。この新しいスタートに当たって、私は皆さんに「学ぶ」ということをもう一度見つめ直してほしいと思っています。

最近、京都大学・佐和隆光教授の書いた「日本人の知的能力劣化、有害無益な受験勉強が原因」という記事（北海道新聞３月22日）を読みました。「受験勉強で詰め込んだ知識がはがれ落ちた後には、空洞化した頭脳しか残らない」という同氏の嘆き（いささか極論ではありますが）に私も同感です。今の大学入試制度はマークシート方式による学力評価に偏っているので、高校教育では生徒に物事を考えさせるというよりも、断片的な知識を無理やり詰め込むという形になりがちです。予備校の教育ではなおさらのことです。そのような形で得た知識が大学入学後に急速に失われてしまうことは当然の帰結といえましょう。確かに大学入試では定員枠を超えればたった１点の差でも不合格となりますので、受験技術の巧みな者が有利になることは否定できません。しかし、大学へ入学してからの試験はそうではありません。全員が真面目に勉強して良い成績を上げれば、全員が試験に合格し、進級します。無理やりにでも選別しなければならないという入試とは根本的に異なるのです。

とは言っても、受験型の勉強方法が長年の間に身に染みついた学生諸君は、大学入学後の勉強でもこのスタイルからなかなか脱却できないというのが実状です。立派な医師になるという遠い先の目標に向かって日々の勉強を積み上げて行くのではなくて、年に２回の定期試験をいかにうまくすり抜けて進級するか、そのことだけが勉強の目的になってしまっているのです。

「近頃、シケタイ症候群（シケプリ症候群ともいう）の学生が急増している」と一部の教官の間でささやかれています。“シケタイ”とは学生の試験対策委員会が作成した「傾向と対策」、“シケプリ”とは友人のノートなどを試験対策用にコピープリントしたもののことをいいます。この“病気”は、不完全な資料を丸暗記することから生じる汎流行性誤答（親亀コケたら皆コケたという状況）、対策外問題・応用問題への不適応、知識の早期忘却などを徴候とし、うっかり見過ごす（進級させる）と、“講義起因型傾眠症”、“講義忌避症”など、より重篤な病状へと進行して行く危険性があります。

しかし、新入生の皆さんの場合には、このような“病気”になる危険性はかなり軽減されるはずです。本学では、上に述べたような問題点を改善すべく、カリキュラムの大幅な見直しを行ってきました。そして、皆さんの学年から新しいカリキュラムが実施されることになったのです（新カリキュラムの内容については、石川教授が別の頁に詳しく紹介して下さっていますので、そちらを参照して下さい）。

“新カリ一期生”となる皆さんには、旧カリキュラムには無かった総合生命科学Ⅰ～Ⅸ、初期体験実習、医学チュートリアルなどのメニューが与えられます。特に、チュートリアル教育は自学自習、問題解決型学習、少人数による討論などを含んでおり、皆さんの身に染みついた受験型勉強の悪癖をそぎ落としてくれるでしょう。皆さんの場合、先輩が持っている過去問集もシケタイ資料もほとんど役に立ちません。すべて最初から独力で勉強し、試験に臨むしかないのです。最初は大変でしょうが、この状況がどんなに幸せなことだったか、近い将来きっと納得するでしょう。

「学問に王道なし」といいます。新しい教育システムを我が武器として努力を重ね、皆さんが大きく成長していくことを期待しています。

（生物学　教授）

医療の優しい担い手として

看護学科第１学年担当　岡　田　洋　子

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。この看護学科は、ご存じのとおり３年前の1996年４月に開設された、誕生まもない学科です。教官数はもとより新校舎もない中で、医学科に仮住まいさせていただいてのスタートでした。この３月に全校舎が完成し、教官もほぼ揃い、そんな中で入学の日を迎えることができたことを、皆さんとともに喜び感謝したいと思います。

以下に、日頃私が考えていることの一端を述べ、新入生に贈るエールといたします。

１．共に生きる

皆さんが入学された今年、1999年は「国際高齢者年」です。日本は急速なスピードで高齢化社会を迎えようとしています。介護・福祉・看護・医療に対する社会のニード、期待は高まる一方です。1991年の国連総会において、高齢者のための国連原則が採択されました。その内容は（１）高齢者の自立、（２）高齢者の参加、（３）高齢者の尊厳、（４）高齢者のケア、（５）高齢者の自己実現、の５原則です。

私は、この５原則は高齢者だけのものではなく、小児や社会的弱者と呼ばれる人はもちろんのこと、すべての世代、人間にとって大切な原則であると考えます。一人一人が異なる個性・能力を有する独自な人間として、ありのままの姿で生きることが保証される社会（自立・参加）、一人一人の人間が大切な存在として尊重される社会（尊厳）、お互いに助け合い補い合う社会（ケア）、そして、一人一人が有する人間特有の能力を発揮させていくことができる社会（自己実現）。

このような社会を迎えた時、それは人間にとって“優しい社会”の到来を意味すると思います。その担い手は私達一人一人です。マザー・テレサが一人で始めた、貧しい人や死にゆく人への「抱きしめ」の輪は、現在、世界百二十カ国にのぼっています。思い悩む時、マザーは私に忍耐と勇気、そして希望と生きる道標を示してくれています。

２．慎みぶかく

看護・医療に対する社会のニードに真摯に応えていくために、これからの大学生活を通して何を学び、どのような人間として自己形成を図っていくことが求められるでしょうか。

私は、多くの出会いや体験を通して、“人が生きる”ことの意味を考え、「人間の尊厳」や「生と死」といった、人間の本質的なテーマに対する関心・感性、そして自分の考え、行動の基盤となるもの（モラル）を培ってほしいと願っています。そして将来専門職者として、生や死といった人間の一生において最も厳粛な「場」に立ち会う皆さんには、人間として“慎みぶかく”あってほしいと思います。

３．病いと癒し

近代医療の進歩の一方で、医療は時に人間に冷たく、無力であるという矛盾を抱えていると私は思います。21世紀の医療・看護を担う皆さんには、高度な専門知識や技術の修得とともに、ぜひ現代の最先端医療をもってしても助からない、あるいは回復が望めない病気で病んでいる人の“心を癒すもの”は何か、“Healing”を大切にする看護者になってほしいと思います。社会が複雑化し、医療が高度化すればするほど、ある面で人間は、心を癒すケアを必要とします。それは看護の大切な役割機能の一つに位置づけられます。

医療の優しい担い手というテーマで、私見を述べさせていただきました。真の優しさには、愛に裏づけされた厳しさも合わせ持つものであると私は信じます。新入生の皆さんが良き友に恵まれ、これからの２年あるいは４年間が、このようなテーマについて深く考える機会となり、実り豊かな学生生活となりますようお祈りいたします。

これからの看護学科は、“ハード面”から“ソフト面”への充実が大きな課題であり、その責任を感じています。学生の皆さんのカリキュラムや教育内容に関する率直な意見・評価を、ぜひフィードバックしていただきたいと、最後にこの紙面を借りてお願い致します。

（臨床看護学　教授）

平成11年度 旭川医科大学入学式
医学科

平成11年度 旭川医科大学入学式
看護学科

新入生を迎えて

医学科第6学年　井 上 明 子

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。これから始まる新しい生活に期待や不安でいっぱいになっていることでしょう。私がこの旭川医大に入学したのは、もう5年前のことになりますが、その年は、雪が多い年で入学式の日もまだ雪が山となって残っていたのを覚えています。大勢の部活の勧誘の人たちに圧倒されながら門をくぐり、そうして私の大学生活は始まりました。5年間は、あっという間でもありましたが、よく振り返ってみると、やはりそれなりに充実した5年間だったなあと感じます。色々なことがありました。1ヶ月も続いた試験などつらかった思い出や、実習で初めて見た大きくてどす黒いカエル、貧血をおこした採血実習、指に糞便がついた寄生虫実習などなど思い起こせば数えきれないほどの事をやってきたのです。このように色々あった5年間の中でも、私が大学生活を楽しく過ごせたのは、いい仲間たちに出逢えたからだと思います。同学年の友達はもちろん、部活（バスケ部）のみんなは、私にパワーを与えてくれました。人とのつながりはとても大切だなと感じます。新入生のみなさんも、何でも話せる本当の友達、仲間ができるといいですね。大学以外では、私は色々なバイトをしました。家庭教師や居酒屋、バーテンダーなど、どれも私にとって新鮮で今までにない経験ができ、色々影響をうけました。世界がちょっと広まった気がしました。又、休みを利用して道東、道南を訪れたり、部の大会で東北や関東へ行く機会もあり行く先々で楽しい思い出ができました。旭川は、すぐ近くに美瑛、富良野があり、ドライブするにはもってこいの場所だと思うので、皆さんもどうぞ北海道の大自然を満喫して下さい。

最後になりましたが、新入生の皆さん、これからは思う存分学び、遊び、楽しんで、満足のいく大学生活をおくって下さい。

新入生を迎えて

看護学科第4学年　伊 藤 直 美

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。

入学して、そろそろ約2ヵ月が過ぎた頃だと思いますが、大学生活にはもう慣れましたか？大学構内で白衣姿の先輩を見るたび目で追ってしまったり、解剖をしている部屋の前を通るたび気味悪く思ったりと新しい環境に興味や不安、緊張は尽きないことと思います。

特に看護学科は開設されてまだ4年目の新しい学科です。カリキュラム上にまだ混乱や不都合があるかもしれません。しかし、新しい学科だからこそ得ることのできることもあります。それは、自らが先駆者であり、伝統を創る者であるということです。私達4学年は第1期生として、また3学年も2学年の方々も2期生・3期生としてともに試行錯誤してきました。今年、皆さん第4期生が加わり初めて全学年が揃いました。全学年が揃ったことで私達在学生も新たなスタートを切ったような感慨があります。これからは4学年揃って共に看護学科の良き伝統を創っていきましょう。

また、建物や設備が新しいこともあります。皆さん、新しい看護学科棟を見て何を思われましたか？私達在学生は、医学科棟に居候させてもらいながら新しい棟の完成を心待ちにしていましたし、完成を心から喜んで、新しい施設で学習できる喜びと幸運を噛締めています。また、看護を学習している者として、大学生として、良識ある者として新しい校舎をとても大切に使うべきであると思います。いつまでも気持ち良く使えるために、お互い気をつけて生活していきましょう。

最後に、有意義な学生生活を過ごすために様々な体験をしてほしいです。勉学ももちろんのこと、部活動や友人から得るものすべてが自分の経験になり、自分を成長させてくれる糧となります、自分の幅を広げておくことが人と接するときに役立ちます。どんな経験も決して無駄になることはないでしょう。一日一日を大切に、充実した楽しい学生生活を過ごして下さい。

平成10年度　学位記受領者名簿

氏　名	課程・論文の別	学位記授与年月日
松村久男	論文博士	平成10年6月30日
八柳英治	論文博士	平成10年6月30日
橋詰清隆	論文博士	平成10年6月30日
坂上晃一	論文博士	平成10年6月30日
安藤修敏	論文博士	平成10年6月30日
中村秀樹	論文博士	平成10年6月30日
井手宏	論文博士	平成10年6月30日
角地祐幸	論文博士	平成10年9月30日
首藤龍人	論文博士	平成10年9月30日
藤井常志	論文博士	平成10年9月30日
神谷和則	論文博士	平成10年9月30日
菅野晴美	論文博士	平成10年9月30日
田屋登康	論文博士	平成10年12月25日
大坪力	論文博士	平成10年12月25日
黒田健司	論文博士	平成10年12月25日
齋藤裕司	課程博士	平成11年3月25日
高橋伸彦	課程博士	平成11年3月25日
高橋知昭	課程博士	平成11年3月25日
田熊直之	課程博士	平成11年3月25日

氏　名	課程・論文の別	学位記授与年月日
石崎賢一	課程博士	平成11年3月25日
Gesase Ainory Peter	課程博士	平成11年3月25日
于立志	課程博士	平成11年3月25日
加藤祐司	課程博士	平成11年3月25日
柳谷典彦	課程博士	平成11年3月25日
北野陽平	課程博士	平成11年3月25日
小村景司	課程博士	平成11年3月25日
清水恵子	課程博士	平成11年3月25日
寺尾基	課程博士	平成11年3月25日
白躍宏	課程博士	平成11年3月25日
陳敏	課程博士	平成11年3月25日
荻野武	課程博士	平成11年3月25日
門正則	論文博士	平成11年3月25日
山田能久	論文博士	平成11年3月25日
稲田尚史	論文博士	平成11年3月25日
野村昌史	論文博士	平成11年3月25日
谷内弘道	論文博士	平成11年3月25日
高岡康男	論文博士	平成11年3月25日

平成11年度　大学院入学者名簿

氏　名	専　攻	指導教官
市川英俊	細胞・器官系	石川睦男
中込咲綾	細胞・器官系	木山博資
佐藤克彦	細胞・器官系	飯塚一
渡邊行朗	細胞・器官系	石川睦男
羽廣敦也	細胞・器官系	高後裕
浅井慶子	細胞・器官系	葛西眞一
小川研人	細胞・器官系	塩野寛
今井浩二	細胞・器官系	葛西眞一
潘伯臣	細胞・器官系	石川睦男
有倉潤	生体情報調節系	葛西眞一
能地仁	生体情報調節系	松野丈夫
辻宗啓	生体情報調節系	松野丈夫
大水信幸	生体情報調節系	松野丈夫
堀川良高	生体情報調節系	吉田晃敏

氏　名	専　攻	指導教官
佐々木麻衣	生体情報調節系	吉田晃敏
鈴木康博	生体情報調節系	菊池健次郎
坂本淳	生体情報調節系	高後裕
上堀勢位嗣	生体情報調節系	牧野勲
小林厚志	生体情報調節系	牧野勲
及川賢輔	生体情報調節系	笹嶋唯博
浅井眞人	生体情報調節系	牧野勲
高弼虎	生体情報調節系	黒島晨汎
辛凡	生体情報調節系	松野丈夫
阿部麻美	生体防御機構系	松野丈夫
伏見弥生	生体防御機構系	高後裕
柳内充	生体防御機構系	原渕保明
大森博之	人間生態系	羽田明

新教育課程の展開

教育課程編成小委員会委員長　石　川　睦　男

本学が1973年に開学以来、第１学年から第６学年まで一貫した医学教育を行うことを特徴としてきました。これは基礎教育、基礎医学及び臨床医学等の全課程を有機的に結ぶ楔型教育システムであり、その時点では斬新なものでした。しかし、開学から25年が経過し、医療を取り巻く社会構造の変化や入試制度の改変による学生資質の多様化などにより本学の教育課程も制度疲労を起こしてきているようです。

すなわち、近年の科学技術の進展に伴い、医学、医療はあまりにも専門化、細分化、高度化し、６年間の限られた期間で広範囲、高度な医学知識、技術を習得させることが困難になってきています。しかし、従来の教育では知識注入型の系統講義が主体であり、一方的な知識伝達であるため、学習意識も喚気しにくくなっています。また、教官は十分教育したつもりであり、学生はある程度習っていると思っていても、大半の知識は短期間のうちに記憶から失われてゆく場合もあります。事実、臨床実習に学生が登場すると、系統講義で習ったはずの知識はほとんど残っていないという状況もでてきています。

このような状況下で、本学教育の将来構想の基本としてアーリーエクスポージャー（早期体験学習）、単位制、学士入学、統合カリキュラム、チュートリアル教育（tutorial教育、少人数課題準拠自己学習－無理した日本語訳・筆者）、臨床実習の早期開始・期間延長、クリニカルクラークシップなどが挙げられました。この方針の下に教育課程編成小委員会が設けられ、1997年12月より25回の小委員会と２回のワークショップを開催して、1999年度入学の諸君から開始する新教育課程が策定されました。本教育課程の特色は、基礎教育、基礎医学及び臨床医学を有機的に結ぶ統合カリキュラムの教育システムを取っていることと単位制にあります。そのために、基礎教育科目、基礎医学科目、臨床医学科目に加えて、統合カリキュラムである共通科目が展開され、基礎・臨床医学科目の一部も、統合カリキュラムとして展開されています。共通科目の中では、医療人として生涯を通じて新たな知識を学び続ける自学自習の学習態度を養うチュートリアル教育が導入されています。教育課程の展開は図のように示されていますが、基礎教育科目は医学英語を除き、すべて選択科目として展開されています。共通科目として、統合カリキュラムである「総合生命科学」が第１学年から第２学年前期にわたって展開します。内容は基礎医学系や臨床医学系も含んでおり、医学科学生として必要な授業内容で従来の教育課程の学生が第２学年から第３学年に受けたものより幅広くなっております。総合生命科学では講義と平行して、実習が展開されます。講義の内容をすぐ応用して、講義の理解を助けるようになっています。また、入学直後から第１回目の「医学チュートリアル」において、単なる知識の記憶といった受験勉強とは全く異なり、医学を学ぶ上で最も大切な自学自習の学習態度を身につけることが要求されます。第１学年夏休み前と第２学年夏休み明けには「早期体験学習」が展開されます。これは、医療、保健、福祉施設の現場に直接触れることにより、今後医学科において医療人として学ぶ学習に関心を深めるきっかけとなることが期待され、将来どのような医療人であるべきかを考える機会となると思われます。基礎教育科目は現代社会人として幅広く深い教養を養うため、第１学年から第４学年にわたって開講され、自らの学習状況に応じて、自由に選択できるように展開されています。入学時に自然科学系の科目の履修の程度が異なる場合は、この選択科目により調整することが可能です。また、情報化時代における医療人に必須な内容を「情報リテラシー」として展開します。高校時代にこのような新しい内容を身につけていない方は受講が望ましいと思われます。第２学年後期から基礎医学科目が展開されます。この時期から第２年次後期学士編入学の学生が加わります。基礎医学の内容のうち、主要な部分のカリキュラムが第２学年後期に展開されます。

さらに、総合カリキュラムの一部である「臨床基礎医学」が、基礎医学系と臨床医学系とを統合して第３学年から展開されます。内容は臨床的な内容が多く含まれます。同時期に既に学んだ基礎医学の内容を応用した基礎医学実習が展開され、臨床応用も含めて内容の理解を深めます。

第３学年の後期及び第４学年の前期には再び「医学チュートリアル」が展開され、平行して臨床医学の統合カリキュラムである「総合臨床医学」が展開されます。第４学年後期には臨床医学科目の必須部

分が展開されます。

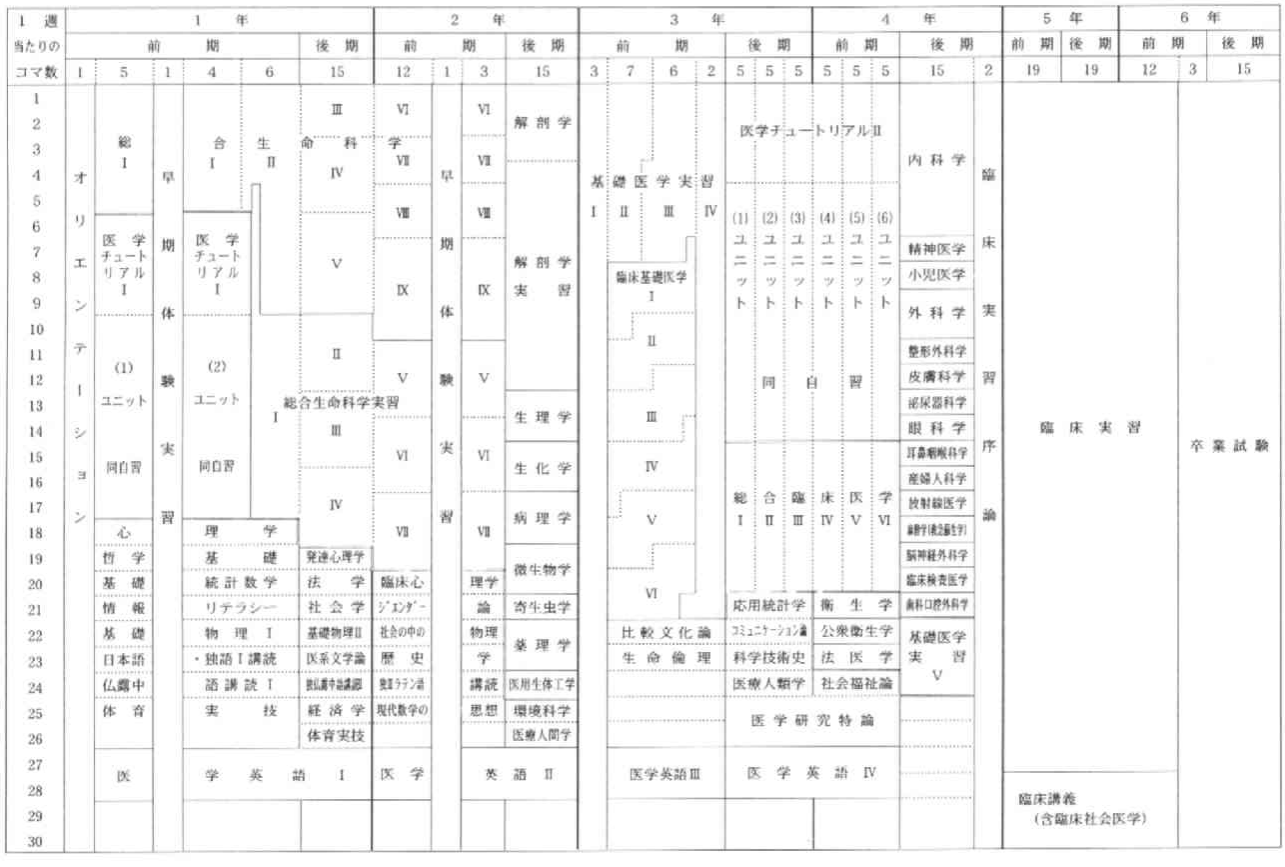
この時期には選択科目として「医学研究特論」が展開されています。医学の進歩のために必須な研究の実際を学ぶために、少人数で講座に配属されます。同時期に展開される必須科目の「医学英語Ⅳ」も少人数で講座に配属されますので、併せて選択すると、より内容の理解が深まります。

また、第４学年には基礎医学科目のうち、臨床医学をある程度学んでから履修することが望ましい科目である「社会医学系科目」が実習とともに展開されています。

第５学年からは「臨床実習」が開始され、第６学年ではクリニカルクラークシップを導入した、より実地に近い「臨床実習」が展開されます。第５学年に上がる前には「臨床実習序論」が展開され、単に知識のみならず、実際に臨床実習に望む態度や技術を養います。これを身につけないと第５・６学年の臨床実習は履修することはできません。医学科の卒業の要件は６年以上在学し必修科目177単位及び選択科目11単位以上、合計188単位以上を修得することとしました。今回、単位制となったため進級したもので不合格科目がある場合は授業科目の履修終了１年間に限り授業を受けることなく単位認定試験（再試験）のみ受験することができるとしました。また、講義時間は効率よく集中するためにも従来の100分から60分に短縮しました。

今回の教育改革では、従来の講義型教育による受動的学習ではなく、自学自習という能動的学習の態度・習慣を育成することが目的の一つとなっており、チュートリアル導入はその中心であります。チュートリアル教育は、少人数で構成された学習グループに共通の課題や症例を提示し、チューター１名が担当する教育ですが、従来のセミナーのように少人数の学生に講義する授業ではありません。学生達はその課題や症例を手がかりに、これを掘り下げ、討議を重ねながら問題解決に至る能動的な自己学習プログラムであります。このチュートリアル教育は、小グループの討議を通して自己の考えを正確に相手に伝え相手の考えを把握する技術やディベイトの技術が訓練されます。また、集団で議論することや医学の倫理面での討議により、社会人として、医師として望ましい人間性や技量を身につけます。さらにEvidence Based Medicine(EBM)の方法論が身につけられ、疾患の機能生理、疫学、診断、治療に関する知識は問題解決の過程で自然に修得されます。さらに、EBMにおいては、いかに適切な報告や論文を選択し、理解するかが必須であり、英語の語学力なしには不可能であり、医学英語コースと相まったチュートリアルは国際的に通用できる語学力を身につけさせることも目標の一つとしております。

科目展開図



外国人留学生一覧

氏　　名	通　称	性別	国　籍	種　別	期　間	所　属
金　殷鉄 ヂン　インティェ	キ　ン	男	中　国	大学院 第4学年	1996. 4. 1～ 2000. 3.31	内科学第一講座
郝　双林 ハオ　シャンリン	ハ　オ	男	中　国	大学院 第4学年	1996. 4. 1～ 2000. 3.31	麻酔・蘇生学講座
Sharifa, Dinara シャリファ，ディナラ	ディナラ	女	バングラデシュ	大学院 第3学年	1997. 4. 1～ 2001. 3.31	産婦人科学講座
馬　紅 マー　ホン	マ　ー	女	中　国	大学院 第3学年	1997. 4. 1～ 2001. 3.31	薬理学講座
肖　春陽 シャオ　チュンヤン	ショウ	男	中　国	大学院 第3学年	1997. 4. 1～ 2001. 3.31	薬理学講座
潘　伯臣 パン　ボーチェン	パ　ン	男	中　国	大学院 第1学年	1999. 4. 1～ 2003. 3.31	産婦人科学講座
高　弼虎 ガオ　ビフー	ガ　オ	男	中　国	大学院 第1学年	1999. 4. 1～ 2003. 3.31	生理学第一講座
辛　凡 シン　フツン	シ　ン	男	中　国	大学院 第1学年	1999. 4. 1～ 2003. 3.31	整形外科学講座
Baljinnyam, Erdenechimeg バルジンニャム，エルデネチメグ	エルデネ	女	モンゴル	研究生	1998. 10. 1～ 2000. 3.31	内科学第一講座
Azurawati Md. Alwi アズラワティ　モハマッド　アルワイ	アズラワティ	女	マレイシア	医学科 第5学年	1994. 4. 1～ 2001. 3.31	
Syamsul Bin Muhammed シャムスル　ムハマド	シャムスル	男	マレイシア	医学科 第5学年	1994. 4. 1～ 2001. 3.31	
Azaharuldin Bin Abdullah アザハルルディン　アブドゥーラ	アザハル	男	マレイシア	医学科 第3学年	1997. 4. 1～ 2003. 3.31	
Hairul Anuar Bin Amir ハイルル　アヌアル　アミル	ハイルル	男	マレイシア	医学科 第2学年	1998. 4. 1～ 2004. 3.31	
Khalilati Barizah ハリラティー　バリザー	エラー	女	マレイシア	医学科 第1学年	1999. 4. 1～ 2005. 3.31	

研究室紹介

法医学講座助手　清水恵子

現在本講座は、初代石橋教授の後任として平成4年に島根医科大学法医学講座教授から着任された塩野教授を中心に、佐々木助手（現在留学中、北大産婦出身）、上園助手（京大薬卒）、清水助手（本学17期）、水上大学院生（本学20期）、小川大学院生（東北大歯卒）と、竹本事務補助員で構成されている。また、教室は開放的雰囲気であるため、準構成員と称される（？）職員、学生の方々が多数出入りされており、病院薬剤部との各種共同研究も始まっている。

本講座の研究テーマは、（1）「DNA多型を用いた性別判定と個人識別」と（2）「中枢神経における法中毒学」である。（1）親子鑑定はもとより、死後数十年、ひいては縄文時代の白骨からの性別判定もDNA鑑定可能となった。（2）①実際の中毒死事例における毒物の定性・定量②中毒原因となる薬物摂取による行動異常（例えば健忘）を行動薬理学的に評価し、ブレイン・マイクロダイアリシス法を用いて各種脳内神経伝達物質を測定し、記憶・学習を含めた高次脳機能の解明③神経毒として、一酸化炭素からパーキソン病などの神経疾患に関する化合物まで、様々な毒物を対象にして神経細胞死に至る機構の解明④薬毒物の血管脳関門の透過性およびその機構の解明、等を行っている。

臨床講座の外来に相当する鑑定業務は、平成10年度を例にとると、司法解剖61体、行政解剖7体、親子鑑定3件、書類鑑定5件、生体検査6件、死体検案110件であった。現実の法医学は、テレビドラマの様な華々しさは無いのですが、興味のある方は気軽に教室をお尋ね下さい。

新歓合宿を終えて

新入生歓迎実行委員会委員長
第2学年　榎　本　年　幸

4月10日、11日と毎年恒例の新歓合宿も無事終えることができました。新歓合宿当日は校舎案内からはじまり、各クラブが個性(?)を発揮してアピールをするクラブ紹介、クラブ出店を行いました。その後、今年もまた神居観光ホテルにお世話になり、先輩との談話やゲーム交流会などがありました。また、クラブ乱入では、各クラブの人々が、新入生の獲得をめぐり、宴会場は戦場と化してしまい、それが終っても新歓委員との交流会が夜通し行われました。今年の新入生も大変元気がよく、合宿中も終始盛り上がり、新入生にとっては良い思い出になったのではないでしょうか。

さて、新歓委員は昨年の11月に結成されてから、総勢約50名で活動を続けてきました。合格者に郵送した大学案内の冊子「旭川医科大学専門学校教本」や、下宿・アパート案内の「ゲッパマン」の印刷や製本、ホテルでの受験案内、運営資金となる広告集収等、新歓合宿当日以外にも地道な作業を行ってきました。また、先日の眼科学講座の吉田教授の講演、そして病院実習の方もゴールデンウィーク明けに行われる予定です。これらの企画は、新歓委員がいくつかの係に分かれ、その各係長を中心に分担して仕事を進めてきました。

ここまでの新歓行事を振り返ると、とても沢山の人々の協力に助けられ、時には迷惑をかけてしまったり、心配をかけたこともありました。しかし、新歓の仕事を通じてより多くの人々とつながりを持てたことは、この上なく幸せなことだと思いました。至らない所の多い自分に最後までサポートしてくれた新歓委員のみんなには本当に感謝の念でいっぱいです。

最後に、私達をご支援して下さった諸先生方、並びに学生課を初めとする事務の皆様方、又学生会、スポンサーの皆様方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。どうも有難うございました。

大学祭のお知らせ

医大祭実行委員会委員長
医学科第4学年　上　田　泰　久

昨年の医大祭の成功をうけて、今年も4年生を中心に大学祭実行委員会が発足しました。4年生のみならず、多くの学生の協力により、より充実した医大祭にするため全員団結して活動に励んでいます。

さて、今年度の学祭をどの様なものにしていくのでしょうか。昨年打ち出した医大らしい大学祭の姿を今年度も継続し、さらに中身の深いものへしていこうという結論に達しました。また、そのような企画をより多くの人に見てもらいたい、地域との交流にも力を注ごうという方向になりました。そのために医学展のさらなる充実、昨年度好評だった健康診断を開催し、多くの人々に医学にふれあってもらいたいと考えています。また今年もFMノースウェーブによるラジオの公開放送とアーティストによるライブ、講演会、フリーマーケットなど地域の方々にも楽しんで参加して頂けるイベントを行います。加えて、例年通りクラブ主体の模擬店も行い、さらに盛りあがった学祭にしていく考えです。

医大は普段、一般の人々との交流が少なく、イメージも偏りがちではないかと思うので、この機会に年齢を問わず、多くの人に訪れてもらい、医大祭と医大の学生について親しみを持って接して欲しいです。その結果として、大学祭以外の場でも地域と深く交流した開かれた大学になっていければ幸いです。

最後に、私達をご支援して下さる諸先生方、並びに学生課を初めとする事務の皆様方、快く協力して下さる地域の皆様方に深く感謝の意を表し、実行委員長の挨拶にかえさせて頂きます。

中国高等教育事情調査団に参加して

産婦人科学教授　石　川　睦　男

今度、平成10年度中国高等教育事情調査団の一員として出張して参りましたのでその概要を報告します。

平成７年６月、与謝野文部大臣と中華人民共和国朱開軒国家教育主任により行われた日中両国の教育交流に関する会談で、中国人留学生を受け入れている我が国の大学等の留学生担当教職員を毎年中国に招待したい旨の表明がありました。文部省は留学生担当教職員の訪中団を組織することとなり本年は、国立４大学、公立、私立各々１大学の教官、国立２大学の事務局長、国立１大学の留学生課長と文部省国際局留学生課より１名の10名で編成されました。平成10年10月５日の中国大使館主催の壮行会に引き続いて、10月６日より北京、蘭州、西安、上海を訪れ、大学関係者、中華人民共和国教育部との交流を行い、10月15日帰国しました。文部省は昭和59年の「21世紀の留学生政策に関する提案」で21世紀の初頭には留学生受け入れ10万人計画を立てました。平成９年留学生政策懇談会で受け入れ環境の整備などが提言されていますが、最近の経済不況やアジア諸国の高等教育機関の整備などの理由により、近年中の10万人留学生受け入れ達成は困難な状況になってきています。平成９年度の我が国に受け入れた留学生は５万１千人で中国からは２万２千人の全体の40％を占めております。10月６日の中国教育部との意見交流でも中国側の日本へ留学生を送っている意気込みもよく判りました。またその席には文部省から日本大使館に、出向している一等秘書も加わり日本の外交との関連についても理解が得られました。今回の中国各大学では我々訪中団に対し熱烈なホスピタリティを発揮していただき歓迎され、ある意味では大変でした。今回は従来のスケジュールにない所として、甘粛省の蘭州にある蘭州大学を訪問しました。氾濫をくり返す巨大な黄河の河岸にほとんど集落はみられませんが、蘭州には町の真ん中に黄河が流れております。古来、黄河から東は「中原」に覇を競う漢民族の地、西は西域に通じる河西回廊であり、敦煌へのシルクロードにつながります。10月８日北京から飛行機で約１時間半で蘭州空港へ、車で２時間で蘭州市内に入り、その後は蘭州大学の招待で有名な蘭州ラーメンを堪能しました。小さい椀の何種類もの太さの麺を同じ味のスープで、色々調味料を自分でアレンジして食べるので最初は少ないと思いましたが、途中でお腹が一杯となってしまいました。翌朝６時に出発して、チベット族居住の夏河にある６大ラマ寺院の１つの拉卜愕（ラプロン）寺院を訪れることになりました。中国教育部の案内の方１名、蘭州大学関係者２名、運転手１名と我々10名で小さなマイクロバスで出発しました。朝８時30分、回族自治区の臨夏の公園で朝食を取りました。目的のラマ寺院に到着したのは約６時間を経過して昼すぎで寺院は休みということで、昼食となりました。大変辛いスープの中に凍結しスライスしたラムを入れるラムしゃぶですが、その他魚貝類を入れるもので大変美味しくいただきました。午後ラマ寺院を視察いたしましたが、バター茶の強い臭いの中、小さな学僧さえ一生懸命宗教の勉強を勉んでいるのをみると、逆に日本の小中学校の不登校につき考えさせられました。また、標高3000メートルの高原を歩くため低酸素で頭がふらふらし、午後に帰路につ

き蘭州市内に入ったのは夜の10時過ぎそれから夕食とこの中国側のホスピタリティに疲れました。

今回の蘭州大学、西交交通大学、上海師範大学、復旦大学（上海）の各大学の訪問において、中国側の日本と学術交流にかける熱意がよくわかりました。確かに研究費を含めた資金不足、施設、教員の質、量の問題で中国の高等教育に問題はありますが、中国政府並びに各省は21世紀を目指して高等教育を整備しようと大変努力をしております。また今回の訪中に参加した日本の各大学の国際交流に対する熱意と努力に大変感銘を受けました。各大学とも大学間協定を海外の大学と行っております。すなわち、自己資金を集め学生や教官を派遣したり、受け入れたりと自助努力で実績を作っております。その後、文部省に対して国際交流センター、留学生課の設置または日本語担当教官や留学生事務担当職員の整備などを要求しております。私共の大学では各講座、学科目単位で国際交流は行われておりますが、大学としての取り組みは遅れておりますので早急に検討しなくてはならない課題と考えております。今回の中国各大学に日本の大学の校章の入ったペナント、クリスタルを始めとする記念品が置いてありました。今年本学でも校章が制定されましたが、今後ペナントや記念品などの選定も検討しなければならない時期にきているのではないかと考えております。

今回訪問した西安の泰始皇帝の兵馬俑坑のスケールの大きさ、玄宗皇帝と楊貴妃が愛した温泉保養地の華清池の美しい庭園や他はガイドブックにある通りです。しかし、上海を訪れると、以前住んでいたことのあるニューヨークをしのぐ近代都市で人口1600万人のダイナミックな勢いに圧倒されました。上海の若い女性のすらりと伸びた脚とファッションセンスに中国の未来を感じ帰国いたしました。

最後、今回の訪中の機会を与えていただきました、久保良彦学長、片桐一副学長、色々御尽力いただいた、学生課、庶務課の皆様に厚く御礼申し上げます。

↑ 文部省留学生課　唐澤伸岳さんと　　筆者　↑ 蘭州ラーメンを賞味しています。

学内ニュース

平成10年度学士学位記授与式

平成10年度学士学位記授与式が、3月25日(木)10時30分から本学体育館において挙行されました。

式では、本学室内合奏団が奏でる調べの中、学長から卒業生99名一人ひとりに学士学位記が手渡されました。

ついで、学長から卒業にあたり式辞が述べられました。

(学生課)

平成11年度入学式

医学科・看護学科の入学式が4月9日(金)10時から挙行されました。

式では新入生医学科96名、看護学科60名、看護学科第3年次編入学生10名を代表して医学科　赤坂直哉さんが宣誓を行い、医学生・看護学生としての自覚を新たに大学生活の第一歩を踏み出しました。

(学生課)

平成11年度運営組織

本学には、医学教育についての調査研究、教育課程の編成、修学指導、授業及び試験の実施、単位の修得及び履修、学籍関係等について審議する機関としての教務委員会と学生の厚生補導に関する調査研究、学生の課外活動、福利厚生等について審議する機関として厚生補導委員会があります。

両委員会の平成11年度の委員は次のとおりです。

〈教務委員会〉

委員長　片桐　一（副学長）
副委員長　松嶋少二（図書館長）
委　員　上口勇次郎（医学科第1学年学年担当）
山内一也（医学科第2学年学年担当）
林　要喜知
坂本尚志（医学科第3学年学年担当）
東　匡伸（医学科第4学年学年担当）
伊藤　亮
髙後　裕（医学科第5学年学年担当）
石川睦男（医学科第6学年学年担当）
松野丈夫
岡田洋子（看護学科第1学年学年担当）
北村久美子（看護学科第2学年学年担当）
阿部典子（看護学科第3学年学年担当）
野村紀子（看護学科第4学年学年担当）
石川一志

〈厚生補導委員会〉

委員長　片桐　一（副学長）
副委員長　岡田雅勝
委　員　三田村　保　　葛西眞一
中村正雄　　原渕保明
橋本眞明　　前田　隆
羽田　明　　松浦和代
宮本健司　　望月吉勝
千葉　茂　　武井　明

(学生課)

新入生研修実施される

平成11年度新入生研修が、医学科は4月19日(月)・20日(火)の両日、本学福利厚生施設において、看護学科が4月22日(木)・23日(金)1泊2日の日程で美瑛町白金温泉において、それぞれ実施されました。

医学科は、新入生を1グループ12名の8グループに分け、1グループに先輩を含む3名の教官が指導にあたり、自己紹介に次いで学生生活全般にわたり助言並びに懇談が行われました。

また、看護学科は、2日間にわたり合宿研修方式で白金観光ホテルにおいて実施され、大学生活で求められる学習への取組と人間関係について、基調講演、指導・助言があり、夕食後の交流会では、新入生間、新入生と教官間の親睦を深めました。

(学生課)

医学科

看護学科交流会

グループ・ワーク

平成11年度の主な行事

4月9日　入学式
4月19日・20日　医学科新入生研修
4月22日～23日　看護学科新入生研修
6月18日～20日　医大祭
9月8日　体育大会
9月22日　解剖体慰霊式
11月5日　本学記念日
3月24日　学士学位記授与式　　（学生課）

教官の異動

定年退職	11.3.31	生化学第二	教授	金澤　徹
〃	〃	衛生学	〃	山村晃太郎
〃	〃	心理学	〃	岩渕　次郎
辞　職	〃	臨床検査医学	〃	池田　久實
〃	〃	解剖学第一	助教授	大森　行雄
辞職	11.3.31	臨床看護学	助教授	松谷　洋子
〃	〃	小児科	講師	矢野　公一
〃	〃	泌尿器科	〃	宮田　昌伸
〃	〃	脳神経外科	〃	代田　剛
昇任	11.4.1	基礎看護学	教授	良村　貞子
〃	〃	地域保健看護学	〃	北村久美子
〃	〃	内科学第二	助教授	中村　公英
〃	〃	脳神経外科学	〃	中井　啓文
〃	〃	地域保健看護学	〃	上野　栄一
〃	〃	第二内科	講師	平野　史倫
〃	〃	小児科	〃	宮本　晶恵
〃	〃	泌尿器科	〃	山口　聡
〃	〃	脳神経外科	〃	橋詰　清隆
採用	〃	臨床看護学	教授	前田　隆
〃	〃	〃	助教授	新開　淑子
転出	〃	〃	〃	岩田　銀子
〃	〃	内科学第二	〃	田中　廣壽
辞職	11.4.30	精神科神経科	講師	松本　三樹

怒　外

橋　本　眞　明

敵を知り己を知らば百戦危うからず
―「大改造時代」が来た

九州大分県は、キリスト教に傾倒した大友宗麟のもと、西洋使節団にメンバーを送り、日本で最初に西洋型の病院が開かれ、演劇・歌劇を中心とした西洋芸術の普及をめざした土地柄。一方で、近代化の暗黒面、軍国主義が闊歩した大戦時代、2.26事件で暗殺された阿南陸相も同県出身でした。同県出身者は、明治維新以来、国家の中枢を牛耳る政治家を多数輩出した長州山口県に比べ、政治家よりは軍人向きと評価する郷土史家が多いようです。理由は、能弁（雄弁？）さに欠け、言葉より先に手が出るから、とのことでした。子供の頃、ペラペラと良く喋り続けた私は、当時の美徳「不言実行」型県民の好例ではあり得ませんでした。行く末を案じたか、祖父の遺言は、『「先生」と呼ばれる人間にだけはなるな』。学生を前にペラペラと怪し気な講義を、怪しいなと思いつつも展開しながら、ふと口篭るのは、遺言に背いた報いかもしれません（勉強不足だっちゅーの）。

海峡を2つも渡り、札幌で過ごした学生時代。学生運動も学内の立て看板になごりを残す時代。何の生産性も無いと思われた、生理学に取り組むことになり、大学院でひと旗揚げるか、となったところで、ヘッドハンティングされ山梨医大へ就職。ヘッドハンティング：目の前にニンジンをちらつかされ、思わずそちらへ走り出すこと（違ったかな？）。研究が続けられ、おまけに給料まで頂ける、「こんな美味しい話はない！」（当然生じる「義務」について考えるだけの良識が無かった）。そんなこんなで現在まで、ヒトはもちろん動物のカラダのハタラキに興味が続く仕事をしております。

光陰矢のごとし。こちらへ赴任してほぼ1年。明治維新以来の体制が変わった後50年以上も「なあなあ」でやって来た付けが溜まっていた訳ですが、バブル崩壊が引き金になったのか、あらゆる分野で「大改造時代」が訪れています。本当に大切な事は何だろうか、を中心に物事を考え始めたようにも見えます。教育機関も例外ならず。赴任後、大学改革に付随する変化が遅滞無く（？）進行しているのに驚きました。積極的にリーダーシップを発揮する、行動力のあるスタッフが居てこその進歩かと思われます。一方で理解に苦しむ事例も2、3見聞きはしますが、状況を理解するには、もう少しかかりそうです。これ以後も医学教育の再編プログラムがめじろ押しのようです。開学当初、ここでもおそらく見られたと思われる、学生の多種多様性が復活することを期待し、微力ながら、お手伝いできればと思います。

この駄文が皆様の目に触れるころ、風邪と雪に悩まされた冬が過ぎ、花咲く季節を告げる風が新緑に囲まれた大学の建つこの丘を吹抜けていることでしょう。　　風立ちぬ、いざ、生きめやも

（生理学第一講座　助教授）